

---

## 中世ヨーロッパの皮革 2. ギルドの形成

元北海道大学農学研究科 竹之内 一 昭

---

### 1. はじめに

古代ローマには「コレギウム」と呼ばれる同職団体がすでに存在していたが、ギルドのヨーロッパにおける起源は7～8世紀のゲルマン民族の相互扶助的な団体にある。アングロ・サクソンのイネ王（668～726）の法典にすでにギルドが記されており、779年にはカール大帝も同様の団体を承認している<sup>1)</sup>。10世紀以降、農業生産が向上し、手工業や商業も発展し、その生産物が教会や宮廷など人の集まる場所や交通の要所で開かれる市で交換あるいは販売された。11～13世紀に商人集団が国王や領主からの特権を確保するために団体を形成した。各地における都市の成立に伴い、宮廷職人の一部は自由と権利を勝ち取り自由民（市民）となり、また修道院で技術を身に付けた職人が都市に移動した。そして手工業者も商人を見習って職種ごとの仲間団体（同業組合）すなわちギルドを形成して権益の確保を図った。同時に製品の品質と量の管理、新規加入者の審査、規律違反者への制裁を行った。すなわち職人の増加を市当局に制限させる一方で、劣悪な製品の製造を自ら抑制した。ギルドはドイツやイギリス、フランスでは12世紀に台頭し、13世紀以降ヨーロッパ中に広く行き渡った。

### 2. ギルドの形成

ドイツでは商人のギルドと区別して手工

業者の組織を地域によってツunftあるいはインnungと称した。手工業者は親方（マイスター）、職人（ゲゼレ）および徒弟（レーリング）の身分に分かれており、ギルドを構成する親方は市民権をもつ自由民であり、職人と徒弟に対し家父長的な存在であった。徒弟の多くは革職人の息子であり、徒弟期間は当初2年であったが、後に3年になった。ツunftは徐々に世襲となり閉鎖的になった。大きな都市では製革業者は水を多量に使用するので、たいてい郊外の川の近くで住んでいた。それで鞣し工（Gerber, Lawer, Loher）という名の付いた川や堀、通りがあった。イタリアやフランスでもそのような名称の通り（Gerbergasse, Kurwengasse）があった。

製革業者は明礬を使用する白鞣し業者と樹皮（植物タンニン）を使用する赤鞣し業者に分かれていた。その他に袋物、鞆、革紐、馬具、革帯、装丁革、箱物、羊皮紙、靴および毛皮の製造業に分かれていた。赤革製造業のツunftの社会的評価は高く、地主や聖職者、医者、その他の名士が加入していた<sup>2)</sup>。13世紀の鞣し業者が裕福であったというエピソードに、ドイツのルドルフ皇帝（1218～1291）がバーゼル（スイス）の鞣し業者の家に寄った折に、着飾った妻に豪華な料理と高級な飲み物を金・銀の器でご馳走され、「こんな贅沢をしているのに、何故まだ仕事を続けるのか」と問うと、

家の主人が「その仕事が贅沢をもたらしてくれるからです」と答えたというものがある<sup>3)</sup>。

ドイツの皮革関連の最初の団体の一つにベルリンの靴屋のインヌング(1284年成立)があり、その後多くの団体が成立した<sup>4)</sup>。当初は製靴業と製革業と一緒にインヌングを設立したが、14世紀以降分離した。なおブレーメンやベルリンなどでは、分かれていた業者が後に一緒になったところもあった。ロストクではインヌングは1258年頃に成立し、製革業者は教会のある大きな共同体をなしていた<sup>3)</sup>。その頃すでに製靴業ばかりでなく白鞣し業とも分離していた。1338年にオッヘンバッハでは赤革の団体、そして1356年にケルンでは白革の団体が成立した。ドイツでは13世紀以前は明礬鞣しに関する記述が見当たらない。南ドイツのアウクスブルクでは、市民が13世紀に自由と権利を法により、司教の支配から独立し自治を獲得した。さらに1368年に独裁を企てるパトリチア(都市貴族、門閥)に抗して、手工業者と職人が市政の民主化を求め、ツunftを結成した。手工業者はすべて17のツunftに組織された<sup>5)</sup>。総数2208人のうち織布工と大工・左官等がそれぞれ550人と200人で多かったが、皮革関係の靴屋、毛皮屋、皮鞣し工、鍛冶屋・馬具工はそれぞれ117、86、42、140人であった。1363年のニュルンベルクでは、革製品製造業者が比較的多かったが、これは甲冑や籠手、馬具などの革製品ばかりでなく、労働者が革製の衣類を身に付けていたことによる<sup>2)</sup>。ジーゲンでは近隣の山から樹皮が多量に産出され、鉄工業との関連で鞣<sup>ふいご</sup>や作業用前掛けが製造され皮革産業が栄えた。ドイツはチューリングン森やスデーティ山地、ライン川により豊富な樹木と水に恵まれており、さらに畜産地帯でもあり、皮革製造業

は盛んであった。植物タンニン鞣しはもっぱらオークとフィッヒテ(ドイツ唐松)の樹皮が使用され、皮重量の5、6倍の使用量が規定されていた。手袋業のインヌングは13世紀に成立した。ビロード状の子牛革の手袋が製造されていた。1400年頃のロストクでは、油鞣しの革を使用しており、油鞣し業者や革紐業者と一緒にツunftを設立した。

フランスにおいては、団体の成立は10～13世紀の間であり、ルーアンでは983年、ストラスブールでは1109年、ミュルーズでは1297年であった<sup>4)</sup>。シャルトルでは、これ以前に製革業ツunftが存在し、1240年頃のシャルトル大聖堂の火災後の再建の際には木枠に鞣し工を工芸的に表したガラス窓を寄贈している。当時はガラスが貴重品であり、宮殿や貴族邸、公共建築しか使用していなかったため、このツunftの社会的地位が想像できる。パリでは1085年以降インヌングが成立し、徐々に君主によって認められ、1345年には国王フィリップⅥ世(1293～1350)によって認可された<sup>4)</sup>。親方の居住地、徒弟期間、鞣製期間、生産量が規定された。特別な機関が製品革を検査・打印し、もし不良品が出ればそれを廃棄させ、その製造者を罰することが出来た。パリでの製革業の発展はポワトゥー、シャテルロー、ポワティエなどの地方にも波及した<sup>2)</sup>。ニオールは白鞣し業の中心であった。手袋業の団体は1190年に成立した。フィリップⅡ世(1175～1233在位)の仲介で、1200年頃パリ商人のためにシャモ(Chameaux)と称する市場が設立され、そこには皮革の広場もあり、革や毛皮、手袋の製造業者も売り場を持っていた<sup>4)</sup>。

イギリスでは、鞣し技術は古くから高度で、上質の革が製造されていた。ギルドはアングロ・サクソンの時代より存在し、ノ

ルマン征服後、特権を得ていた<sup>4)</sup>。リチャードⅡ世は1395年に皮の会社 (Skinner's Company) の規約を認め、自らも会員となった。この会社によって、ケンブリッジのカレッジの一つが設立され今日に至る。皮革業者が1660年のカールⅡ世の王位継承にも大きな影響を与えた。なおスイスのベルンやドイツのロストクでも地主や聖職者、医者、その他の有力者も入会しており影響力があった。12世紀の最古の規約では、鞣し作業所は決められた場所 (たいてい森の近く) 以外では許されず、さらに廃水に関する規制があり、ロンドンでは週に1度清掃することが決められていた。厚物の皮は少なくとも1年間鞣し槽に浸漬するとされたが、通常はそれを超えており、後に3年にまで延長された。樹皮はオークのみ使用され、とねりこ (モクセイ科) は禁じられた<sup>2)</sup>。これによりイギリスの革は品質がよく、大陸でも高く評価された。皮革産業の発展した主な都市はコルチェスター、オックスフォード、ベルヴィックオンツイードであり、後にロンドンも挙げられる。白鞣し業者は毛皮を鞣す場合には動物の種類を明らかにするために頭を切断しなかった。

手袋製造の最初の団体は1162年にパース (スコットランド地方) で認可されている。アイルランドのダブリンとリムリックも上質の手袋を製造し、それは死産の子山羊の革を用いており、“Chicken gloves 雛鳥の手袋” と称された<sup>5)</sup>。類似品はフランスでも製造された。14世紀以降イングランドのウースターでは手袋用革が専門的に製造されていた。手袋の輸入は1826年まで長く禁じられていた。

イスラム系のアラビア人 (ムーア人) が711年にジブラルタル海峡を越えてスペインの大部分を征服し、カリファート (イス

ラム国家) の首都をコルドバとした。これに伴いオリエントで発達した皮革製造技術が持ち込まれ、製革業者が領主によって保護され、さらにアラビア人がコルドバの住人に鞣しや染色、塗金の技術を教えたので、製革業は産業的に発展した<sup>24)</sup>。コルドバで生産された明礬鞣し革はコルドバ革 (スペイン革) と呼ばれ11世紀にヨーロッパに普及し、柔らかくてきめ細かい見事な革として名声を博した。コルドバ革の色や色調はいろいろであり、当時の上流階級の人々はコルドバ革の靴を好んで履いた。あまり交通機関の発達しない当時ですら、コルドバ革は広範囲に普及し高い評価を得ていたため、コルドバ革に由来する用語が多く生まれた。フランスでは、上質革 (Fein leather) を扱う靴屋のことをコルドンニエ (Cordonnier) と呼び、北東部のストラスブールでは上質革製造者をクルデヴェナー (Kurdewaner) またはクルヴィーナー (Krweener) と呼んだ。イギリスでは上品な靴をコードヴァイン (Cordewain)、靴屋をコードヴァイナー (Cordewainer) と呼んでいた。最上質の革はレバント (地中海東部からエーゲ海沿岸地方) 産であったが、スペイン、フランス、ハンガリーおよびドイツ産の革も優れていた<sup>6)</sup>。13世紀には製革業者の団体が成立していた。13世紀のフランスでは、スペインとフランドル (ベルギー・オランダ・フランスに属する北海沿岸) の産出革のみが市場に持ち込むことが許されていた。

11世紀にはスペインはキリスト教の国家になったが、皮革技術は残留を許されたムーア人 (モロ人と呼ぶ) によって継承された。しかし16世紀初期のカトリック的伝統を重んじるフェリペ (フィリップ) Ⅱ世 (1565~81在位) の迫害によりムーア人がスペインから追放され、資本と技術が流出

スペインでの革製造は徐々に消失していった。

スイスのバーゼルで中世初期の手工業者の居住地が発見され、そこには革片や靴、サンダルなどが存在した<sup>7)</sup>。これらの革は主に山羊革であり、羊や馬の革は少なく、豚や牛の革はさらに少なかった。革製品はライン川やドナウ川、ボーデン湖を通じてバーゼルに送られたと推定される。14世紀にはハンガリーの皮が輸入されたことが確認されているので、鞣しも行われていたと考えられる。製革業者のインヌングの設立は14世紀であり、バーゼルでは斃死動物の皮ならびに馬、犬、狼の皮を鞣すことを禁じており、ベルンでは革の品質、取引および親方と徒弟の比率を規制していた<sup>4)</sup>。ベルンの聖堂には、製革業者用の礼拝堂がある。そこには15世紀の手工業者ギルドの紋章の彫刻があり(図1)、その中には動物の王であるライオンと製革工具(銚刀<sup>せんとう</sup>)が彫られている製革業者のものがある。これは職業に対する誇りを示している。1428年のバーゼルの人口は約1万人であり、赤革業者が59人、製靴業者が133人であった。59の業者が年間360枚、総数21,240枚の革を生産しており、この数はその都市の革需要を上回っている<sup>2)</sup>。このことはライン川

を利用して革を輸出していたことを示唆している。同規模の都市であるドイツのフランクフルトやウルムでは、製革業者は25と13であった。ソロトゥルンやビール、フライブルク(フリブール)でも上質の革が輸出されていた。よく用いられていた鞣剤はオークではなく、ドイツ唐桧と白樺の樹皮であった<sup>4)</sup>。

ハンガリーではボルガ川付近を出身とするマジャール人が古代ローマのパノニアに定住する前にオリエントの民族から白鞣しを学び、丈夫な革を製造していた。馬具や革紐が1350年にはドナウ川上流で使用されていた。このハンガリー革はドイツやフランスに普及した。フランス語のハンガリー(Hongrie)に由来するHongroyeurとHongroyageはそれぞれハンガリー風の白鞣し工や白鞣し革を意味している。

スペインにおける宗教迫害により、製革業者がイタリアやモロッコに移動した。イタリアの開港都市ジェノバやヴェニス、ピサ等は外国との貿易があり、アフリカからの原料の輸入と製品のヨーロッパ各地への輸出が容易であった。ピサの底革や毛皮ならびにヴェニスの皮革製品は15~18世紀において世界的に有名であった<sup>24)</sup>。

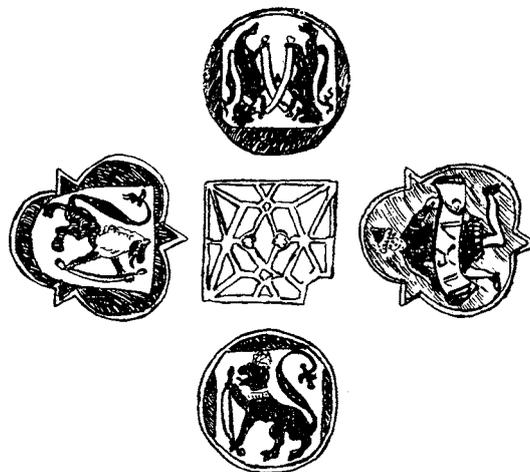


図1 スイス手工業者ギルドの紋章

### 3. まとめ

中世のヨーロッパにおいて、手工業者は同業組合すなわちギルド（ツunft、インヌング）を形成して権益を確保したが、自己規制により製品の品質を保持した。また社会的地位も高く、自らの利益だけでなく、社会貢献もしていた。

#### 文 献

- 1) 阿部謹也：朝日百科 世界の歴史 6  
14～15世紀, 朝日新聞社 (1991) P.  
D356.
- 2) Körner, T. : "Handbuch der Gerberei-  
chemie und Lederfabrikation" I-1,  
(Grassman, W., Hg) , Springer-Ver-  
lag, Wein (1944) P. 1.
- 3) Kobert, R. : "Beiträger zur Geschichte  
des Gerbens und der Adstringen-  
tien" , Verlag von F. C. W. Vogel,  
Leipzig (1917) P. 42.
- 4) Bravo, G. A. : "100000 Jahre Leder  
Eine Monographie", Birkhaser Verlag,  
Basel und Stuttgart (1970) P. 223.
- 5) 諸田實：朝日百科 世界の歴史 6  
14～15世紀, 朝日新聞社 (1991) P.  
D375.
- 6) Watt, A. : "Leather Manufacture",  
Crosby Lockwood and Son, London  
(1919) P. 276.
- 7) Gansser, A. : "Frühzeitliche  
Lederfunde" Collegium, 318 (1939) .